通釈】 起句　　春風が吹いて来て、まつ先に御苑の梅の花を綻ばせると、

 　　　　 　承句　　桜(ゆすらうめ)、杏(あんず)、桃(もも)、梨(なし)等、庭の花々が次ぎ

　　　　　　　　　　 つぎと咲いてゆく、

 　　　　　 転句　　都から離れた草深い田舎の里では薺(なずな)の花や楡(にれ)の莢(さや)も

　　　　　　　　　　 また、

 　　　　　　結句　　春風がわれわれのために吹いて来た、と喜ぶのだ。

 【語釈】 苑　　　草木を植えた庭園。宮中の庭園。御苑。

　 　　　　　櫻　　　ゆすらうめ、桜桃。苑に植えて実を食す。

　 　　　　　次第　　順序。つぎつぎに。順次に。

　 　　　　　薺　　　なずな。ぺんぺん草。

　 　　　　　楡莢　　楡は樹木の名。にれ。春、新芽に先立って莢のある小花を付ける。楡莢は

　　　　　　　　　　 その莢（さや）。

　　　　 　　亦　　　もまた。・・・もまた・・・である。

 【押韻】 平声、灰韻。梅、開、來。

 【解説】 白居易（七七二－八四六）字は楽天は、中唐の大詩人。

　　　　　官は高位にのぼり、当代最高の文人としての名声を擅にし、当時稀にみる七十五歳の

　　　　　長寿を全うし清らかな晩節を全うした稀有の人。

　　　　　この人の詩は本欄でもすでに多数鑑賞している。

　　　　　この詩は作者六十歳頃の作とされている。この頃白居易は政争を嫌い、中隠と称して

　　　　　洛陽郊外に隠棲し、仏教への傾倒を深めていた。

　　　　　詩は、起句、承句に、梅に始まって桜(ゆすらうめ)、杏、桃、梨と次々に綻ぶ苑中の

　　　　　花を詠じて、都で春を謳歌する高貴人達を思わしめ、転句、結句では、これまであま

　　　　　り詩中に入ることの無かった野生の薺や楡に目を向けて、都から離れた村里で春を楽

　　　　　しむ素朴な庶民の生活を思わしめている。津々浦々に及ぶ春の自然の恵み、政治も

　　　　　かくあるべしとの含意とも受けとれるし、又足るを知る生きざまへの共感とも受けと

　　　　　れる。白居易の詩らしく、用語はすべて平易ながら、味わい深い逸品です。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（玉井幸久）